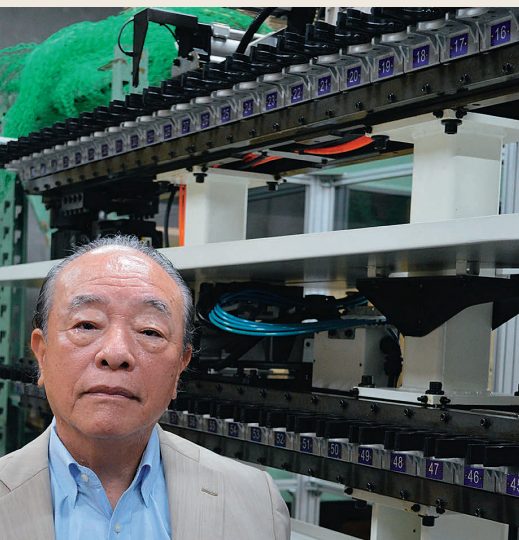


海外工場運営の修羅場をくぐり

台湾を拠点に工作機械の革新に貢献

株式会社 グローバル・パーツ

精密機械部品や装置の開発製造を行っている、(株)グローバル・パーツ。東大阪市に本社を構える同社は日本のメーカーでありながら国内に工場を持たず、台湾の6カ所の工場を中心拠点として、国内外の工作機械メーカーへ部品や装置を供給しています。今回は、創業者であり代表取締役会長兼社長の増田進彦氏に、海外での工場運営や昨今の海外情勢もふまえたリスクに対する考え方などをお伺いしました。



株式会社 グローバル・パーツ

代表取締役会長兼社長：増田 進彦 氏
 本 社：大阪府東大阪市森河内2-6-16
 創 業：2007年（平成19年）
 社 員 数：国内11名 海外112名
 事業内容：工作機械関連部品及び装置等の
 設計・製作・販売
 URL：http://glo-j.co.jp/index.html



台湾工場外観

― 国内で工場を持たない理由

当社は工作機械向け精密機械部品の開発製造を行っており、売上の約9割が工作機械メーカー向けです。国内には工場を持たず、台湾の6カ所の工場を中心に生産し、日本国内にて品質検査を実施後、各顧客へ製品供給している点が当社の大きな特徴です。このような形に至るまでの経緯を、順を追ってお話ししていきます。

私は大学卒業後、父が社長を務める鋳造・機械加工メーカーに入社しました。ポンプの継手などの製造から始まり、経営にも携わるようになった頃、父の会社は海外の2社と合併で中国に工場を立ち上げ、私はそこにも関わり始めました。当時、鋳物工場は典型的な“3K”職場で、日本では人材確保が難しくなりつつあったことに加え、材料調達面からも中国が有利であったゆえの海外進出です。

その後も父の会社で中国や台湾の合併会社の経営に携わっていましたが、あるとき自分で一から会社を立ち上げたいと思うようになりました。

そして、台湾で運営していた合併会社の事業を引き継ぐ形で設立したのが現在のグローバル・パーツです。これまで蓄積した海外工場運営のノウハウを最大限に活用し、国内では自社工場を持たず開発に特化した形のメーカーを目指すことに決めたのです。

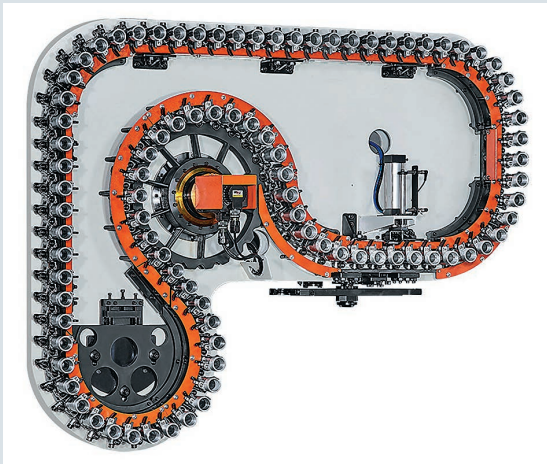
― 海外工場運営の修羅場をくぐって

海外での工場運営は、技術力や工場管理能力などが非常に重要です。当社も一朝一夕にそういったスキルを得たわけではありません。台湾工場の運営には、当社立ち上げ前の中国と台湾での合併会社での経験が生きています。

合併会社での工場運営はトラブルの連続でした。台湾では不良率が9割に達し、3か月間技術者を張り付けてなんとか対応したこともありましたが、中国では合併会社の資産である金型が、全くの他社案件に転用されていたこともありましたが、最終的には、材料調達面や人材面の課題が重なったことに加え、リードタイムが3ヶ月ほどの製品に7～8ヶ月かかるような状況になり、資金繰りも含めて負担が大きすぎたため、深手を負う前に中国の合併工場は閉鎖しました。持ち出しこそなかったものの、投資に見合うリターンがあったとは言えませんでした。しかし、今にして思えば非常にいい経験をしたと思っています。

その経験を通じて学んだ最も重要な原則は、一番大事なのは「人」であるということです。どんなに良い設備や機械やお金があっても、運営するのは人です。そこに魂が入っていないと、良いものづくりはできません。ものづくりの基礎となる理念をきちんと

これまでの知見を活かし開発した新機構のATCマガジンで、工作機械の革新につなげる



同社の技術の粋を集め開発した ATC (Automatic Tool Changer) マガジン。マシニングセンタなど工作機械の工具を自動で交換するための装置です。最大 120 個のツールを自動で交換できる機能を備えますが、最大の特徴は、一般的なチェーン式ではなく、2021 年に特許を取得した独自の駆動方式を採用している点にあります。

- ①消費電力が 1/3 で、SDGs にもつながる
- ②振動も 1/3 で精密部品の加工精度が向上
- ③3 割コンパクト

チェーン式に対するこれらの優位点が顧客である工作機械メーカーに評価され、既に設計仕様の打ち合わせを行っているメーカーもあります。顧客企業への周知と改良を進め、本格受注を目指しています。

持っている人と組まなければいけないと痛切に感じました。今はその考えをベースに海外工場を運営しています。ものをつくることに一生懸命で、なによりものづくりが好きかどうか。そういった観点を重要視しています。

グローバル・パーツでは、こうした「人」を大切にする工場運営を礎に、現場ベースでは思い切った生産効率の向上に取り組んでいます。台湾でも人件費が年々上昇していることを背景に、210 台の工作機械とロボットを活用した製造ラインの自動化を既に実行しました。

現在取り組んでいるのは、工場内の見える化です。工作機械 1 台ずつに蓄積されている稼働データをビッグデータとして活用しており、まだ発展途上ですが、納期や稼働状態、工具の摩耗具合まで把握することができています。最終的には、飛び込みの注文に対して、納期や目標原価から逆算して、最適な製造ラインを設備が自動で判断して作り始めるような領域にまで高めたいと思っています。

—台湾を巡る地政学リスク

現在の懸念事項のひとつは台湾を巡る地政学的なリスクです。ロシアのウクライナ侵攻以来、中国の台湾侵攻を懸念する声も多く聞かれます。台湾侵攻の可能性は低いと考えています

が、台湾海峡の封鎖はあり得ると感じています。そうすると当社の物流網は大きな打撃を受けます。お客様から不安の声を寄せられることもあり、我々としても根拠なしにリスクを否定するのではなく、次の手を具体的に考えなければなりません。

そのひとつとして、国内工場の設立を検討しています。人件費は台湾と比較すると上がりますが、自動化を進め、国内でも同等コストでできるような状態で準備しておきます。いざ危惧していたことが起こった場合も、1 年ほどで工場を立ち上げ、その間は多めに在庫を抱えておけば、お客様への納品は止めずにすむという算段です。

—台湾での出来事と恩返し

当社の 11 名の社員のうち、現在は 3 名が台湾出身です。これまでも継続して台湾の方を採用し続けています。これには私なりの台湾への恩返しの意味もあります。

今でこそ、当社は無借金経営ですが、資金繰りが苦しい時期もありました。その時に助けていただいたのが、台湾の取引先の方々でした。当社の事情を察し、担保も証書もなしに支払いを猶予いただけたことで、当社は難局を乗り切ることができました。ひとりの人間として私を信用してくれたことに心から感動し、それ以降、信用を裏切

るわけにはいかないと事業に邁進し、現在に至ります。その時の感謝を台湾という国に報いたいとの思いが、今も私の胸にあるのです。

—新たな事業分野への進出

工作機械部品に加え、現在当社は工作機械用装置の開発にも取り組んでいます。特に注力しているのが、マシニングセンタの構成部品である ATC マガジンで、取引のある工作機械メーカーを中心に商談を進めています。

ATC マガジンの切替は、顧客にとっては基本設計から見直しが必要になる大がかりな設計変更です。当社としての新分野への挑戦という点も含め、お客様にとっても大きな冒険となります。採用いただくためには、確かな信頼を得なければなりません。既存のつながりに加え、展示会なども足がかりにキーマンを探して実機を見ていただき、裏付けできるデータを提出するプロセスを積み重ねているところです。まだまだ課題も多いですが、お客様の反応も上々です。これからあくなき挑戦を続けていきたいと思っています。

—貴重なお話をいただき、ありがとうございました。